

Book Review

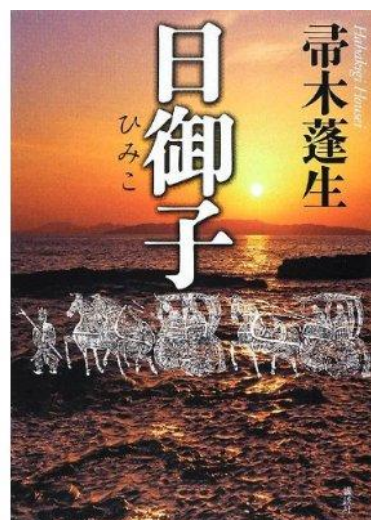
箒木蓬生 『日御子』

講談社 2012年

頁数 540

ISBN 978-4-06-217677-4

評者 鶴田知佳子



人はいかにして通訳者になるのか。常日頃、考えているところに 2012年7月15日付日本経済新聞の「通訳の一族通して古代日本描く」というこの本の書評が目にとまった。同日、産経新聞に載った書評は「人間と国家の在り方を問う」というものだった。箒木蓬生(ははきぎほうせい)氏の「日御子」(ひみこ)は200年近い年月を通じ、9世代にわたりことばを武器として戦った使譯(しえき)と呼ばれる通訳者一族の姿を通して、人間はどう生きるべきか、国家はどうあるべきかを問いかける。まだ文字がなかった古代日本と中国を舞台に、日本史上の志賀島で金印が見つかった記録や、『魏志倭人伝』といった中国の史書から断片的にうかがえる当時の日本の姿を語っている歴史小説である。小説であるからこそ、小説家の豊かな想像力で「まるで現場を見て来たかのように」語るストーリーテリングの妙味に心打たれた。ここで描かれている通訳一族の姿は巧みに通訳者の本質をついている。

この小説においてはなぜ通訳者になるのかの答えは明らかで、世襲であるからだ。一族の中の語り部の何人かの口から、一族がいかにして通訳者としての誇りをもち、各々が通訳者として任えているかが語られていく。統一されておらずそれぞれが分断されていた倭(わ)の諸国とは比べものにならないほどの力を持っていた、当時の圧倒的超大国であった中国王朝との外交に通訳として尽くす様子から、人と国のありかたが興味深く浮かび上がってくる。

まず本作は三部から成っている「漢委奴国王印」と記された金印を授かって帰朝した第一部からはじまり、第二部は邪馬台国(小説では弥摩大国となっている)の隆盛が描かれる。第三部は魏志が戦乱にあけくれる分断された日本を訪問するところを描いている。作者の文字へのこだわりは長い物語のあちこちで伺われるが、冒頭で登場する耶国(なこく)の使譯として漢への朝貢の旅に赴いた灰(かい)は、耶国が金印に奴国とされたのをずっと悔やみ、後に自身も伊都国の使譯として漢へ赴いた孫の針(しん)に亡くなる前にその悔みを語っている。この小説では女王卑弥呼も日御子とされている(日の出とともに生まれた御子であるからと説明され

ている)。作者が灰に語らせているところによると、漢字には良字と悪字があるという。文字がなかった当時の日本を表す文字について使譯の一族は敏感だ。

日本から中国への建武中元2年(紀元57年)、永初元年(107年)、景初2年(238年)の朝貢の様子が使譯の視点から生き生きと描かれている。当時は首都の洛陽まで往復に一年以上を要する旅であり、出される酒の旨さ、箸を使つての食事作法、食材や調理法の豊かな食文化に感動し、馬車に乗せられて驚き、紙や鉄の技術に驚嘆する。文明の程度も圧倒的に違う大国への朝貢に携えているみすぼらしい品の中で、唯一誇れるのが生口＝人間であった。もとは大陸から東(あずま)を目指して倭国にやってきた一族とされる<あずみ>の一族は、あまりの違いに打ちのめされそうになった。そんな中でもこのあずま一族は表記こそ那国では安住、弥摩大国では安潜、伊都国では安澄、求奈国では阿住などと違っているものの同じ一族が倭国のなかに散らばったと伝えられており、使譯としての共通の教えを守っている。国の境をこえて一族どうしが交流している姿には、国際性や、ことばで交渉することを通して平和に貢献できるという考えも伺える。国は変わっても言葉は変わらないとも書かれているところから、文字はなくても共通語があったという設定になっている。

さらに針のひ孫であり弥摩大国の巫女(みこ)となり国王の日御子を育てた炎女(えんめ)がひとつ付け加えて、教えは四つとなった。日御子自身がこの四つを教えられて育ち、炎女に自分も使譯であると語るところは象徴的だ。その部分を引用しよう(p391)

「日御子も使譯のつもりで、これまで生きてきた」

「炎女の家が、人と人をつなぐ使譯であれば、わたくしは、天と人を結ぶ使譯だと思ってきた」

巫女も天からのことばを伝える「通訳者」の役割を担っていると示唆されている。成長した日御子が魏に朝貢の使者を送るときに使譯を務めたのが炎女のおいの在(ざい)であった。物語はさらに魏からの使者がやってくる時に助けた在の息子の銘(めい)、その甥の浴(よく)と息子の治(じ)が、戦乱の世の中を平和に導くために使譯としての任務にまい進していくであろうと予見させて終わっている。ちなみに<あずみ>一族の名前は木(もく)火(か)土(ど)金(ごん)水(すい)の五つの文字からつけるのを繰り返し、女性の場合には「女」(め)をつけているという命名のしかたである。

以下が四つの教えである。

人を裏切らない

約束は守り、恩や親切を受けたならば、返さなければならない。

人を恨まず、戦いを挑まない

恨んで戦うと、天の恵みが受けられなくなる

良い習慣は才能を超える

絶え間ない良い習慣があれば、才能など何の重みもない

骨休めは仕事と仕事の転換にある

仕事の中身を変えるのが、骨休めなのだ

一番目、二番目は人の生き方として感銘深い。四番目は、絶え間なく休みなく働いているということだ。それぞれ味わい深いの中でも一番考えさせられたのが三番目である。通訳者一族は三番目の掟を守って、常に自己のことばの力に磨きをかける。使譯の一家に生まれた子どもは、ほかの家の子どもが遊んでいるときにも「一族に生まれた定め」を重く受け止めて文字を覚え、文字をつづる勉強を厳しく躡けられた。厳しい勉強があったからこそ、成果をあげることができた。韓国との交易に携わり、中国への朝貢では通訳を行い上奉する文書の清書も手掛けた。交渉においては使譯のことばだけが頼りという緊迫した場面におもむくなかでの緊張感や責任感、職務を立派にやりとげるなかで中国の相手方から信頼を得ての心の交流、炎女が死ぬ間際に語るように「自分の一生は何という恵まれた一生だったろうか」ということばなど、充実した一生を示す姿も描かれている。

最初に登場する語り手の灰(かい)が語るところを引用する(p16)

朝起きて、木簡に字を書き、刀子(とうす)で削っては書く。木簡に書かれた文字を何度も何度も素読する。日が高くなっても同じ仕事をする。日が沈む前の薄暮のなかでも、やはり読み書きをする。その絶え間のない良い習慣があれば、持って生まれた才能などは露ほどの重みもない。

これは三番目の掟を指しているが、この掟は通訳者養成のなかでも強調したい大事な点である。才能ではなくて、習慣を身につけて勉強にはげむことが能力を育てるのである。使譯(通訳)一族に伝わる四つの教えには、大いに共感し、また考えさせられた。

著者は福岡県出身、東京大学仏文科卒、九州大学医学部卒の精神科医である。2013年2月22日の朝日新聞夕刊によると、講演に訪れた奈良で、学者は九分九厘、邪馬台国は近畿だと思っているという話を耳にしたというのが日御子を書いたきっかけであるという。この本を読んで著者の篤木蓬生氏に興味を持ち、過去の著作を紐解いてみた。過去の著作にはフランスに留学した経験を活かした『聖灰の暗号』『薔薇窓』、医師としての立場から発展途上国の病気の問題にどう関わるかの問題提起をしている『アフリカの蹄』、その後の発展を描いた『アフリカの瞳』、同じく医師としての問題意識から書かれたと思われる『受精』『エンブリオ』『インターセックス』『風花病棟』がある。そのほか『国銅』『逃亡』といった日本の過去の歴史に題材を

とった歴史小説がある。『日御子』は歴史小説であるが、使譯の視点で語られている点で是非お勧めしたい。

国のありかた、人としての生き方を描いているスケールの大きな歴史小説であるものの、通訳という仕事の専門職としての誇りが伺われ通訳者のありかたにも深い示唆を与えてくれる。多くの通訳者、通訳志望者にお勧めしたい。

.....
【著者紹介】

鶴田知佳子 (TSURUTA Chikako) 東京外国語大学大学院総合国際学研究科教授。NHK衛星放送、CNN同時通訳者。会議通訳者。AIIC (国際会議通訳者教会) 会員。